

長澤 亜紀 4年 演奏学科 弦管打楽器専修（フルート）

研修先 浜松国際管楽器アカデミー（日本・静岡県）

1. 研修概要

- (1) 研修機関：浜松国際管楽器アカデミー
- (2) 研修日程：2007年7月28日～2007年8月1日
- (3) 担当講師：ダヴィデ・フォルミザーノ

浜松国際管楽器アカデミーは今年で第13回を迎え、世界でもトップクラスの管楽器奏者による講習会である。期間中にはレッスンだけでなく、演奏会も開催される。フルートは3つのクラスが開講され、私は今回、ダヴィデ・フォルミザーノ氏のクラスを受講した。

2. 研修の目的

フルートという楽器を手にしてから10年という月日がたとうとしている。たくさんの喜び、楽しさ、悲しみ、悔しさなどをフルートとともに実感してきた。たくさんの経験により、フルートという楽器の魅力を日々感じつつも、自分自身の課題を感じ、壁に直面していた。普段とは違う環境で、フルートという楽器、そして自分自身を見つめ直すことにより、音楽の幅を今までより広いものにし、自分の新たな一面を見つきたいと思い、浜松国際管楽器アカデミーを受講することにした。

3. 研修内容

〈受講曲〉

- ・ジョリヴェ リノスの歌
- ・シューベルト 「しぼめる花」の主題による序奏と変奏
- ・カルク＝エラート ソナタ・アパシヨナート

〈レッスン内容〉

〈第1回 7月28日〉

本来ならばこの日のレッスンは午後からのはずだったが、グループレッスンがなくなり、午前からレッスンとなった。開講式が終わり、フォルミザーノ氏のレッスン室に行き全員が揃ったところで、「グループレッスンはやらないから1人目のレッスンに入る」ということを言われた。最初のレッスンは、ジョリヴェのリノスの歌をレッスンしていただいた。自分では、作りこんでいたはずが、フォルミザーノ氏の音楽の作り方と全く違い、曲に振り回されてレッスンは終わったといった感じになってしまった。言われてもすぐに対応のできない自分自身に苛立ちと不甲斐なさを感じた。今日最も多く言われたことは息の方向性のことである。明日もレッスンがあり、今日の続きからやるということになった。今日のことを少しでも消化し、明日のレッスンに

臨みたいと思った。

<第2回 7月29日>

この日のレッスンは10時からの予定が、順番が変更になり、1番最後の時間になった。きのうのレッスンが長くなったため、今日は短めにやるということになった。今日は昨日の続きで、ジョリヴェの中間部からレッスンしていただいた。8分の7拍子のリズムに息をうまくのせることが課題となった。フォルミザーノ氏の音を横で聴き、言われたようにやってみるものの、全くうまくいかない。レッスン後、落胆している私に、通訳の方が話しかけてくださった。音が出ないということを私が言うと、「出てないわけではない、力が入りすぎているのでは」ということを言ってくださった。フォルミザーノ氏は確かに魅力のある演奏をするが、私が全く同じ音を出すのは不可能である。骨格も息の量も、つまり身体づくりが全く違うからである。しかし私は、なんとかしなくてはと思い、身体に力が入り、身体を硬直させ、自分で自分を緊張状態に追い込んでいたのだ。フォルミザーノ氏の指導は非常に細かいが、基を辿れば、支えをしっかりとさせること、息に方向性を持たせること、喉をあけ口の中を広くして力を抜くこと、ということだったことに気付いた。明日も今日の続きをみていただく。自分自身をコントロールして、レッスンに臨みたいと思った。

<第3回 7月30日>

昨日までの2回のレッスンのことを頭におき、ジョリヴェの最後のレッスンを受けた。リノスの歌で最も歌心を持って吹かなくてはならない、8分の7拍子の歌の部分では、歌い方やリズム、アクセントやテヌートを使って語りかけるようにということと言われた。またいつでも、支えるということを忘れてはならないということ強く言われた。ジョリヴェで3回のレッスンを受けたが、結局重要なことは、きのう気付いた3つのことだったということを感じた。明日は最後のレッスンとなる。最後まで緊張感を持ってレッスンを受けたいと思った。

<第4回 7月31日>

今日は最後のレッスンだった。最後は、カルク＝エラートのソナタアパシオナートを見ていただいた。最初に全て通した時、「とてもいいです、いい練習をしてきましたね」と言われた。レッスンの内容としては、息の方向性についてと言われた。この曲の問題点は息の方向性と圧力のかけ方にあった。しかし課題はあるものの、テクニク的にコントロールすることができていたようで、ジョリヴェの時よりも、レッスンの内容が充実していた。最後がこのようなレッスンになりよかったと思う。

4回のレッスンでは、自分のさらいこみの甘さとコントロールすることの重要性を感じた。完全にコントロールできるようになることで、音楽にも余裕が出てくる。それは自分と向き合い、さらいこむことによってうまれるものだと思った。また、私は感情的になりすぎるあまり、身体に力が入り、喉がしまってしまったということがよくわかった。気持ちをこめるのは大切なことだが、身体の余分な力を抜き、リラックスさせることによって、いい響きはうまれるということを感じた。

4. 研修を終えて

今回のアカデミーを通して一番感じたことは、表現の多様性ということである。今回私は、今までにふれたことない音楽感にふれることができた。今回フォルミザーノ氏が指導してくださった表現が全てではないし、自分の思っている表現が全てではない。表現というものは、答えがなく、限りのないものである。演奏を聴いている人に何かを感じ取ってもらえる演奏をする、そのためには、自分が気に入った表現方法だけを自分のものにするだけでなく、いろいろな表現方法とふれあうことが大切だということを感じた。音楽を勉強している今、自己満足だけで音楽をするのではいけないということを強く感じている。自分の音楽により、自分自身が幸せに感じることはもちろん、聴いている人に対して何を伝えるか、音という生き物を使い、相手に何かを伝えること、これが私の目指す姿である。そのために、様々なことと向き合い、ありのままの自分を見つめ、フルートとともに自分自身を高め、人間として一步一步成長していきたいと思う。

最後になりましたが、今回このような機会を与えてくださった大学関係者の皆様、先生方、友人、家族、たくさんの方々のおかげで貴重な経験をすることができました。本当にありがとうございました。そして、いつも熱心且つ的確に指導して下さる大友太郎先生はじめ、御世話になっているたくさんの先生方に心より感謝申し上げます。



ダヴィデ・フォルミザーノ先生と